

刻されてゐた。これが全體として沈降した結果
到るところに溺れ谷を形成し、現在東松浦半島
や北松浦半島(長崎縣にあり)に見るが如き極め

て複雑なる鋸齒狀の沈降海岸を生じたのであ
る。次に此の海岸についてしばらく述べてみよ
う。(未完)

地名の地理學的考察とその一例(三) (第十六卷第 六號の續き)

小林 悟 一 郎

h、方

之も平面を基本思想としたもので、方向のみ
ならず方域の意味にとつてもこゝに入れるのが
至當と思はれる。大體左の如きものである。

野方(早)眞方(糸)澄方、只方¹・姫方²・姫方(三)「北方(杵)」¹二
六府方(杵)平方(井)

平地の二個は別として、山地部のものはよく
地形の變化が方域の觀念に密接に作用してゐる
ことを物語るものだと思ふ。(第二圖參照) 貝
方のみは山深き谷であつて峽方の意であるから

別として、他は皆山麓である。野方は延喜式な
どに額田驛とあるものだとされてゐる。夕を田
に取るならば糠田又は深くて足が埋れて行くヌ
カル田であらねばならぬが、筆者地形を案ずる
に叶岳列の丘麓原に近くあり、その北西なる「平
原」なる地名と思合せて、ヌカタなる音に變り
ないが、野方の用字が妥當なるを想ふのであ
る。

眞方は加布黒村字東の谷の東側にあつて、小
丘を負ふ。その小丘の北端には野添がある。共

第 二 圖

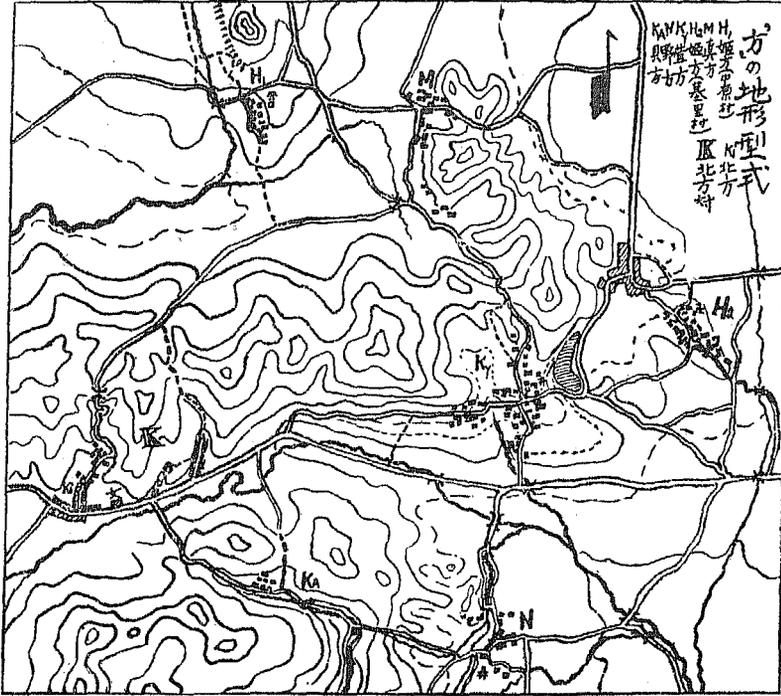
地 球

第十八卷

第二號

三

四六



に自然の地形に依るもので、「方」の存在の至當性を傍證すると思ふ。眞の義は東といふ部落名、及この眞方が谷盆の東縁にあるので「午」のウマの約ではなからうかと思ふのである。

萱方は、群石山(三)の南を切る斷層線に近く南面して並ぶ牛原、古賀と連るもので、それらの地名から萱方の名もふさはしさを痛感する。之もたしかに「方」の部の標本で、小さい乍らそこは扇状の山麓原の上に建てられたものである。(萱方及程遠からぬ貝方も共に方俗キに頭註してヤマンキヤカカタと言ふ)

姫方に就いては少々説明せねばならぬ。同郡には基里村と中原村とに即ち二つあるが、風土記には山田郷姫社郷と列記する所から

姫社を姫方と結付けられてゐるから——三根郡の方即ち今の中原村のものでないか——そこには山田と姫方が遠く距たらずある——と思ふ人がある。併し風土記の説述する所を見るに「此郷之中有川、名曰山途川、其源出郡北山、南流而會御井大川」とあり、山途川は山手川の意で今の山下川だと言はれるので、基肆のものとして差間ないと思ふ。「御井大川」に就いては後に關説することがあらう。姫社コッに因みて説ける傳説は、御原郡のもの焼直しと思はれて、荒神に崇られる原因をトめて、宗像の珂是胡に奉祀せしむる時、彼珂是胡が幡を捧げて、この幡の吹き飛ばされて祀るべき神の邊りに墮ちよと祈らうとする時、「墮御原郡姫社之社更還飛來落此、山途川邊之田村」とあるからさう思ふのである。姫方に織女神を祀つてゐることは風土記の言ふ如くであつて、古來そのヨドは近郷の有名人祭りである——地名辭書の方が却つて誤つてゐる——。姫社・姫方の姫が織女であつたか、又は單なる女神

であつたかは今判じ難いが、そこに祀り上げられたものに起つてゐることは信じてよからうと思ふ。コッは併し社ヤシの意味でないことは勿論で、コッコッに「社」字を用ひるのは萬葉に多く古代からの當字である。之に類するものに糸島の高磯神があるが、コッコッは私の考へでは敬稱だと思はれる。新羅第一世の赫居世の居世及居世干等は官名とみなされてゐるが、或時代には日本に於ける「君」又は「殿」の用法に似た敬稱として、用ひられたことがありはしまいかと思ふ。雄略紀に百濟王加須利君カッリキといふのがある。このキシキシは吉士で、百濟の官名といはれ、加須利君は名を慶司ケシとしてゐたこともあるから官名かも知れないが、敬稱たる意味があるものと思ふ。敬稱として通用される以前は吉士吉師などが原字であつたかと思はるのである。カンリキシカンリキシのキシに君を當ててゐる所から見ても、少くとも日本に於いて敬稱に用ひてゐたと思はれる。古事記にも君をキシキシと訓ませる所は多い。そしてこの

キシとコセとは通ずると思ふ。従つてコンも同類だと考へるのである。日本で大殿オホドモコンとか父コンとか言つてゐたのも、この意味から來たものと思ふ。結局姫社は姫殿・姫君の義と取りたい。その鎮座す方域を指して、姫方と呼ぶのでないかと思ふのである。然りとすればコンからカタへの轉訛を強いて信ずる必要はないと思ふ。山下川の西岸小高い洪積地にあるので、「方」と呼んで方域を示すにはふさはしい所である。中原村のも同様に解釋出來まいかと思つてゐる。

北方も六角川中流低地に於ける、北方の方域で連徳山から鬼の鼻山に連る山列の麓域である。最も用義明瞭なものである。

平地の二つは濁でないかといふ疑念もある。

六府方に於いては有明海岸に近い新沖積地で、ドブ濁とも言ひ相な所であり、平方―枚方とも書く―に於いてはその水上の「小跡」にも用水池―自然に對して僅かの人工しか加へてゐない

―があり、水下の「茶屋」あたりからは沼が多いことからして、濁と思はしめられる點が多い。若しこの二者が濁とでも確定出來たら「方」なる地名は山麓即ち傾斜の變化する地域、傾斜地と平坦地の界線の特有とも、定義出來るに至るかも知れない。少くとも或る種の地形が異種と接壤する所にあることは、概則といひ得る。併し時には河川などにより何方と分ち呼ばれることもある。

分ブンは領域の思想を含むのでこの部に入れないが、キタと讀む場合は、方域を指すものとして此の部に屬せしめねばならぬ。併し本地域に於いてはキタに「分」の用字あるを見ない。北字を當てたものは既に前述した如くである。

i、場所

位置詞に入れる方がいゝと思ふのでこゝに述べるが、左の如き地名がある。

飯場(早)草場(糸)仁位所(小)屋形所(佐)政所(神)草場(杵・佐・瀬・八・八・井)福所(佐)瓦場(瀬)四ヶ所(八)高場・大

庭(朝)

文字からいつて所と場とに別れてゐるが、その中、場では草場が最も多い。概ね山麓原なる草野に當る所である。山門の草葉の如きも同類と見做される。瓦場は瓦工場ある地の謂で、良好の練瓦山をも練瓦場といふ相である。高場、大庭は字義自明であらう。「所」には草の野トビ老らしいものもあるが、この事は植物の部に述べる。四ヶ所は同郡の志村などと同義で四ヶ部落の集りである。

j、向

相對向せる地點を呼ぶのであるが、概して之には起伏を伴ふ場合が多い。中に水とか谷などの低地があつて始めて距たれる彼方に向ふと指呼する時が多い様である。一連の平坦地である時はこの稱呼を見出さない。各戸に就いて家の向き合へるを向ひといふが、その種のものはいないのである。左に示す如く割合に山地に多い(平地の七割以上)ことはその一證である。

地名の地理學的考察とその一例(三)

向・向佐野・御迎(筑)向野(糸)迎田(神)向平原(三)向町
(佐)迎島(神)向島・江迎(三)向島(瀨)向野・小向(井)向福島
(朝)

右の中筑紫の御迎に就いては、かの續風土記などに安徳帝の御幸を少郷大藏種直が御迎にこゝまで出て來たといひ、或は僧湛譽が院使を御迎したと傳ふるが、成程那珂川の谷を安徳臺―泥熔岩から成る河成の段丘と見てゐる―に塞がれた上流域即ち山田盆地から見れば門戸の觀もする所であるが、余は之をあまり信じたくないのである。何となれば大藏氏は「別所」などの地名ある所から推して、井尻の瀬戸から上にはゐなくて、山田の盆地及安徳臺が各居館又は砦塞であつたと思はれるに、帝の御幸を早くより知りながら、御迎までしか御出迎申上げなかつたとは思はれないのである。院使云々も如何はしいのである。地名の起原といふものに斯かる種類の説は多いのであるが、單に御迎したといふ様な事はその土地にどれだけの形跡を與へる

三元 四九

であらうか。その御迎するが爲め奉迎の御駐輦所でも出来たといふならば兎も角、此の種のものは疑はしいものが多い。この御迎は筆者はあくまで地形に依つて、尾向か小向であつたと思ふのである。

向福島はその親里福島と對向してゐることがそのまゝ言ひ表はされたわけである。

k、間

間小路(糸)＝間(瀝)の二つはハザマと訓むので正しくこの部に屬する。その他では野間(筑)が山麓である外は、大阪間(三)宅間田・馬間田・高間・大間(入)端間(井)角間(浮)等すべて低地にある。併し右の中で宅間田は田隈田らしく思はれるし、馬間田の間も疑はしいもので、駿河東部あたりから相模にかけて見られる端ヤと通ずるものか、馬牟田・茨田の類が未だ判断し難いものである。

1、極邊詞

この用語はあまり勝手なものであるが、或る

自然物人工場の邊、縁、極、端、末を示す詞を集めてかく呼ばうとするのである。

端

川端(糸)山葉ヤシバ(小)出羽(佐)片繩(筑)＝沖、端(山)船端・端間(井)

山葉は山端で、出羽の羽も端と考へる。片繩は片、端の轉であると思ふのである。端間は併し畑間とも思はれる、只參考に擧げるに止めねばならぬが、その代り旗崎などのハタは却つて端とも取られるのである。ハタをベタと言ふ爲に邊田・部田などの用字を見受けることがある。長部田(東)＝池邊田(神)山邊田(入)などである。併し大抵耕地の山麓に迫る所などであれば、田はそのまゝ取ることも出来る。端をハナといふことから花字を當てることがある。フィールド外であるが八女(山中)の花巡などは端巡であること明かでフィールド内では早良の竹之花などはその一例で背後に大藪といふ部落があるので竹之端だと思ふ。僅かの起伏ではあるが地形

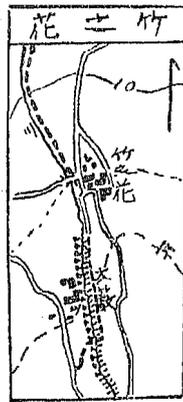
を按ずると一層ハナの語意が悟られるのである(第三圖)。

邊

邊田(糸)牟田部(東)神邊(三)邊田・神邊(杵)道邊(小)矢
ヶ部・松延(山)長延・井延・邊田・前(八)片延(朝)

牟田部は田部になぞらへて部を用ひたかと思はれる。神邊は或は神ノ戸かも和れぬが、三養

第三圖



基のも杵島のも他地方の訓み神邊カンベと異り共に
ーノエといふのである。神ノ戸カネノドなどに近いこと
なる。神領だと解釋すると杵島のは領かれるが
三養基のはびつたりと來ない。その用字は建武
頃から見えてそう新しいものでない。その部落
の東を流れる大木川の東は荒穂宮の領域で、以
西は別に曾根寄老松宮のものとなつてゐるが杵

島のものとは異り兩神域とも各一連の地である部
落は川の西にある。故に茲に於いては杵島のも
の如く神領と殊更にいふべき理由は明瞭では
ない。却つて「神」字が疑はしく河の邊でない
かと思はれるのである。暫く邊の部に述べて置
く。

延は乃邊又は野邊に當てたものと思ふ。松乃
邊—即ち松本・松下と同類—井之邊である。邊を
ホトリと訓むのは道邊一つであつた。

以上に擧げた端、邊は一般に低地に多かつた
様である。併し邊田・延は概ね山麓と見られる。
山地部に於いては「ハ」が多い。

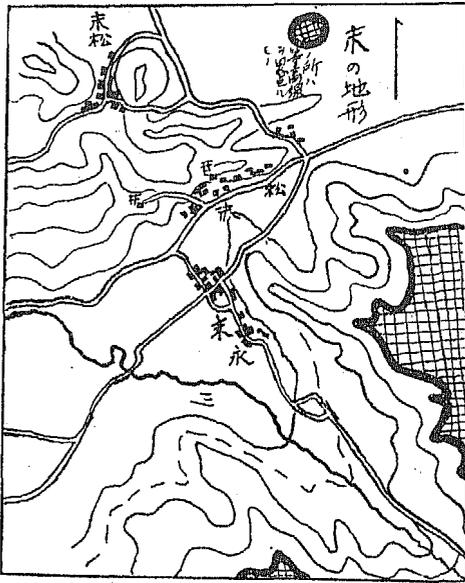
末

末永・松末・末松(糸)末次(佐)末石・包末(浮)吉末(朝)

この末に就いては直ちに嘉字を探つたものと
考へる人が多いが、決してさうばかりでない。
試みに糸島郡に就いてみるに三個ともよく末と
呼ぶに妥當な地形にある(第四圖参照)。末永は
大場山の北西へのスバーが長く亙つて行く、そ

の西麓にある。松末は松ある尾末と取られる。深江の北から濱窪まで連なる山丘は、松末及下松末の北背をなしてゐる。末松も山丘の支脈に

第四圖



依る。他は繁を避けて讀者の賢察に待つ。たゞ浮羽の包末は堤末と考へられたい。かく述べて來ると包末などを除けば山尾などに末と呼ばれ

て、一つの地形詞とも見ることが出来ると思ふ。今暫く從來一般の考へに従ひ末端の末として茲に列ねる。

添

これは轉訛に於いては末とよく紛れ易いものである。勿論原義に於いて異なることは讀者の知られる通りである。即ち之は「邊」に類するものである。フィールドの「添」を列擧すると左の如くである。

- 野添・熊添(筑)野添(早)野添(糸)小副川(佐)副川原(ツヒヒラ)
- カキソヒ
- 桑木添(三)中副・川副—東西南北の四村—池副(佐)打添・野添(井)

添・副は同じだと思ふが、ソヒが崖・岨即ちソハの意を有するものがある様に思はれる。副川原の如きは地形から見てその疑ひが濃厚である。

添の中では野添が最も多くあつたわけである(第五圖参照)。その分布を見ると山地部に極めて多いことは特に認めねばならぬ。山麓によく

取られ、西寄は寒水川シヤツズの西岸にある。依井はヨリ堰の意味と思ふ。兎に角寄・依は之の部に加へられるものと思ふのである。

尙「頭」と呼ぶものがある。川頭カウツツ(小)頭野(神)

三江頭(佐)等で川頭の如きは羽金山の懐ろ、川上川支流の源頭にある。字義明白地形妥當である。江頭も嘗つてありし江岸の中の位置を示せるものである。頭野は背後の頭野山といづれが先在であるかといへば、山名が後であつて頭野は山の形容でないと思ふ。部落は谷頭にある。三養基にもトウノといふ山名谷名が多いが、之等は皆塔乃と思はれるものでこの項に入れ難い。又東松浦と三瀨には田頭ツといふのがあるが、之も極邊詞ではないとも言へるが、即ち田の中の意で沖に屬するものとして置く。

二次限は概ね上述に盡されたと思ふが、東西と口とが最もその數が多かつた。東西の如きは少々その方角から外れてゐてもさう呼ばれてゐる。口はその用法の便もあり、又口といふ所に聚落の發達が多いことを表明したのでなからうか。極邊詞が示す、地形其他の自然及人文環境の變化する界線が人類住居に便があることは周知であると思ふが、斯く地名詞に表はれることそれだけで興味を惹くことだと思ふ。この消息は東西にも應用出来ると思ふ。即ち南と言へば東よりも西よりも開放してほしい方向であれば、各戸の新築に當りても、都市以外の場所の制限なき平野に於いては東西に延長される傾向が多くはあるまいかと思はれるのである。

(未完)